カトリック高松教区報

２０１９年７月７日（第１９１号）
発行所　カトリック高松司教区　広報委員会
〒760-0074　高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区：catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.jp
広報：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成：　yousei@takamatsu.catholic.jp
WEB://www.takamatsu.catholic.jp/

マザー・テレサの言葉
最大の悪は、愛の欠乏、隣人愛の欠乏です。
最大の悪は、隣人に対する、ぎりぎりの生活をしている人々に対する、搾取されている人々に対する、そして貧困や病気にさいなまれている人々に対する、恐ろしい無関心です。

教会の豊かさを社会へ

高松教区司教　諏訪榮治郎

近頃、同窓会の案内がたびたび来るようになりました。高校を卒業して50余年、切磋琢磨したあの時が懐かしく同窓会のお知らせです。

思えば入学した中学校の1学年が19クラスあり、1クラス55人のすし詰め学級ゆえ、プレハブ校舎の増築で、校庭はありませんでした。

「人生は競争である」と小学校時代から叩き込まれ、6年生での授業は7時間目までありました。この間、徹底した民主主義教育を受けた私たちの世代は「宗教　信仰」教育は全く受けていないのです。

この私たちの世代だけでも700万人が存在し「団塊の世代」と呼ばれています。

高齢化社会を築き、今後「病　老　死」の苦痛、痛み、悲しみに向う30年間、すさまじい状況がこの日本の社会を覆うのではないでしょうか。

旧友からのメールには、「ゴルフももう飽きた。どう生きるのか、どう死ぬのかわからない」とありました。教会の存在意味を考えざるを得ません。

日本にある「お寺」の存在はどうだったのでしょうか。お寺の境内を自由に通って学校や買い物に行き来していたように思います。

イエスの愛が求められる
痛み、悲しみに直面する時代

またお寺の庭や森が仲間たちとの格好の遊び場でした。

しばしばお祭りがあり、人々の出会いがあり、野宿の人が自由に寝起きし、それをとがめることなく毎日の生活とどこかで結びついていたように思います。

最近「レジリエンス」という言葉が社会、企業、行政、教育などのいろいろな場面で言われるようになっています。

「レジリエンス」は回復力、元の形に戻る復元力、元気、快活、弾力という意味の言葉です。

苦痛、痛み、悲しみに直面しがちなこの社会にあって、どのようにこの「レジリエンス」を持つことができるのか？　という話を聴いておりました。

その時しみじみと、イエスの愛と慈しみ　癒し、赦しの恵み、福音に出会うことを思いおこした次第です。

「教会に与えられた豊かさ」をこの社会へ「福音マーケット」することが求められているのです。

社会の中にある教会が人々の生活、喜び、健康、寄り添い、町おこし、支えあい、子供の教育、回復プログラムなど、さまざまな善意にあふれた活動で、地域の人々に教会の場と時間と心を提供できる、これが福音宣教ではないでしょうか。

さる5月7日私たちの尊敬するジャン・バニエ氏が帰天されました。

知的障害を持つ方々と共に生きる「信仰と光・ラルシュ共同体」をとおして様々な福音の証しを発信されました。

特に、共同体の中の「赦し」が強調されておりました。

「赦すことによって」赦す側も憎しみと悲しみからの解放を得、赦された側も負い目、報復からの解放をいただき、互いに新たな関係に生まれ、自由に生きることができる恵みを語っておられました。

私たちも福音の奉仕者として社会にある教会として生きていきたいものです。10月「教区民の日」に向けてご検討ください。

ＫＪ法で福音マーケットのための宝を探す女性の会メンバー

見つけた教会の宝を発表する女性の会メンバー

司牧現場での数々の問題話し合った
司祭集会に参加して

6月3～4日、北条カタリナ・セミナーハウスにて、恒例の司祭集会・研修会が開催されました。

参加者総勢20名の司祭、助祭、修道者が、2日間に亘り、共に祈り、食し、分かち合いました。今回もとても有意義なひと時となりました。

1日目は、祈りとオリエンテーションに始まり、今年度の司教書簡における司教の思いと問題提起を論じ合いました。

高齢化、外国籍の人の増加、精神的な苦悩の問題や回復力（レジリエンス）等、現実の諸問題にふれました。

その上で、そのような社会の只中で人々と生きる教会として、さまざまな善意にあふれた活動のために、教会という場と時間と心を提供するための問題提起がなされました。

そのために、司牧者は、上から目線と思われるような福音宣教ではなく、福音の奉仕者にならねばならないということでした。

このような思いと問題提起を受けながら、現実と夢の両面から分かち合う時間がとられました。

まず、4つの具体的な活動として、ＩＣＣ（外国人司牧）、霊性センター（ダルク）、赤岡教会内施設（町おこし）、幼稚園チャプレン（カトリック教育）の報告がなされました。

質疑応答もしながら、課題と可能性を僅かでも共有できたと感じました。

その上で、教区民の日に向けて、活発な話し合いが持たれました。

現実の宣教司牧の現場においては、幼稚園等を通してカトリックに憧れる人は多いながら洗礼数は年々減少していること。青少年の活動も縮小傾向にあること。多くは高齢化した小教区が多いということ。普段は閑散とする教会の姿であること等がまず繰り返し確認され、打ち砕かれるような思いも互いに共有しました。

夢を語りながら、夢に向かう障壁もたくさん確認される場面がありました。それでも、最初に受けた司教様の書簡における思いに立ち戻りました。

すなわち、この社会にあって、心ある人々の活動に応え思いを寄せるということです。

また、日本人だけの教会を想定せず、外国籍の人のために教会を開放していくこと等、沢山の使命があるということでした。

晩には夕食と懇親会を通して、ざっくばらんな交流を持ちました。

2日目は、司牧現場における結婚問題について、教会法上の原理原則について司教様よりレクチャーを受けました。その上で、個々の事例や様々な疑問点が分かち合われました。

このセッションも、時間が足りないくらい活発な意見交換がもたれました。

最後は、2日間派遣のミサをもってプログラムが修了しました。

沢山の課題や司牧現場での“宿題”と共に、互いの交わり・励ましの時を頂けたことが何よりも大きかったと感じます。

時に意見が分かれる瞬間があっても、福音の奉仕者として共に働く面白さのようなものを感じさせて頂きました。

高山　徹

ざっくばらんな夕食懇親会

3位に入賞
司祭・助祭交流会ソフトボール

五月晴れの5月18日（月）長崎大司教館に近い、医大のグランドで「西日本司祭・助祭交流会」が行われた。大阪教区から以西の7教区の司祭・助祭たちが、教区対抗ソフトボールの総当たり戦が行われた。高松教区は高山神父とスティーブ神父の大活躍で例年のごとく3位に入賞した！。ただ当日は高松教区の若手司祭が少し欠けていたため、長崎教区から補充していただいたが。試合後、１５０名ほどの司祭・助祭たちの懇親会は志を一つにした者同士、互いの支えあいとなる様々な交わりをいただき、素晴らしい集いとなった。毎年続けられているこの集いは、司祭たちの「日々の糧」となる大切な、喜びと感謝の一日となるのです。

はばたき

先日、カナダ人のカトリック思想家でラルシュ共同体の創始者ジャン・バニエ氏が亡くなりました。彼は心身障害を持つ人と持たない人が共に支え合い、祈りながら生活する共同体「ラルシュ（箱船）」を創設し、それは世界中に広がり、今では１５０ヶ所をこえており、日本にも静岡市に「ラルシュ・かなの家」があります。また、「信仰と光」を共同創設して、心身障害をもつ人とその家族や友人が定期的に集まり支え合う国際ネットとなっています。

イエスの福音の本質は神の国であり、マグニフィカトで聖母が謳われているようなこの世のあらゆる価値の転換、逆転ということにあります。この逆転への道筋を示してくれるのが知的障害をもつ人たちだというのが彼の思想の根幹であり、知的能力によって、人の価値を決めつけてしまう現代世界に対して、神が弱い人々を特に愛されていることを強調するのです。

「彼らは私に生きること、痛みと苦しみについて、イエスに従うとはどういうことかを教えてくれます。イエスに従おうと願うなら、成功と権力への階段を昇ろうとするのではなく、はしごを一段一段降りていかなければなりません。傷つき苦しむ人と出会い、そして共に歩むのです。」（「ひとつとなるために」ジャン・バニエ著）彼は数々の著書を残していますが、それを読めば彼の呼びかける静かな声が聞えてくるでしょう。「福音を生きなさい、ゆるし合い、競争のはしごを降りなさい。」と。

『典礼奉仕』のために（33）

2018全国典礼担当者会議報告
信徒による典礼奉仕の共通理解を求めてその2

高松教区典礼委員長　谷口広海

今回からは18年度の典礼研修会で掲げられた研修内容から順次解説をして参ります。

今回はテーマに取り上げられた「典礼における信徒の奉仕職」について考えます。

1・第2バチカン公会議公文書

・典礼祭儀は、信者の行動的参加によって、司式者と会衆がたがいに奉仕し合うことによって執り行われます。（『典礼憲章』14、26、28、29、41、48条など）

・信徒は洗礼と堅信を通して使徒職に任命されています。（『教会憲章』33）

典礼における信徒の奉仕職

・信徒には司牧者の職務と密接に結びついている霊魂の世話などを委任することが出来ます。（『信徒使徒職教令』24）

2．教会法　第230条

A男性の信徒は、司教協議会が決定した年齢に達しかつ適正を有する場合、規定された儀式によって、朗読奉仕者又は祭壇奉仕者の奉仕職に恒常的に任命されることが出来る。ただし、その奉仕職の授与はその者に生活の維持または報酬を教会から受ける権利を与えるものではない。

B信徒は一時的に任命されて、典礼行為における朗読者の任務を果たすことが出来る。またすべての信徒は解説者、聖歌隊員、その他の任務を果たすことが出来る。

C信徒は、奉仕者が不足し教会に必要と認められる場合には、法の規定に従い、朗読奉仕者または祭壇奉仕者でなくとも、その若干の任務、すなわちことばの奉仕職を果たし、典礼の祈りを司会し、洗礼を授け、聖体を分配する職務を果たすことが出来る。

第231条

信徒は恒常的又は一時的に教会の特別の奉仕に任命された場合には、その任務を正しく果たし、かつ、その任務を良心的、献身的、および熱心に果たすことが出来るように、必要な養成を受けなければならない。

3・「ローマミサ典礼書の総則」－第3章「ミサにおける務めと奉仕」

・祭壇奉仕者（Acolytus）と朗読奉仕者（Lector）は相応しいと認められた男性信徒に限られ、選任されます。

・奉仕者も信徒も、自己に属することだけを、そのすべてを果たすことを心掛けます。

・信者は特別な奉仕職を依頼されたとき、神の民に喜んで仕えることを断ることはできません。

・祭壇奉仕者が不在の場合は司祭と助祭を助けるために信徒の奉仕者を任命することが出来ます。

・朗読奉仕者が不在の場合にも聖書朗読を行うために他の信徒が任命されます。

次々と各種青年の集い開催へ

「青少年司牧委担当司祭会議」・5月8日（水）観音寺教会にて、

「何を大切にしていくのか、夢を語ろう 」のもと、2019年度の青年たちへの活動計画を協議いたしました。

以下、各地区やブロックで青少年担当者のチームをつくる。外国籍の青少年の教育も課題。彼らのカテケージスも、小教区で難しければ 互いに協力。

▼9月14日（土）～16日（月）「教区青年の集い」を行う・日本人青年を　対象。仲間作りを主眼にする。
- 教会でこそ得られる時間と体験を企画する。
- 会場は、「霧の森コテージ」（高知自動車道・新宮）とする。施設利用料金がかかるが一粒会やブロックに経済的支援を願う。
- 15日（日）は例年小教区で、「敬老の祝福」があるが、出来れば、前の週に終えて、若手司祭が 1人でも多く青年の集いに参加できるようにお願いする。
- 教皇フランシスコ来日予定での 「Young & Pope」も見据える。

▼8月12日（月）～13日（火）「歌って踊って平和を語ろう」徳島教会にて。
12日（月）・・阿波踊りに
13日（火）・・平和の集い「人生を変える出会いの力」
（五十嵐広志・マザーハウス主催）

▼9月29日（日）「インターナショナル若者の集い」 難民移住移動者の日」に合わせて行う。
- 場所は瀬戸大橋記念公園（予定）。西讃ブロックに 協力を要請す　る。

▼今年度のＩＣＣ活動（カトリック　インターナショナルコミュニティー）は以下の通り。
- 6月9日（日）「聖霊降臨の国際ミサ」松山教会。参加が可能な青年は連れていきたい。
- 外国籍の青年たちにとって、司教様との親しい交わりは嬉しい体験となる。

モンテッソーリ子どもの家

マリア・モンテッソーリ女史（20世紀、イタリアの医師、教育者、モンテッソーリ教育法を確立）は、「地球を一つの家族とみて、環境と生物の一体感」を述べています。

「尊い生命を得た子どもたちは、『人間は、自然とつながって生きている』という意識をもって育っていかなければならない。それには平和な心をつくり、人格的にも成熟し、自立できるように育てていくことだ」と強調されています。

私が「モンテッソーリ子どもの家」を主宰して10年余り、地域への子育て支援と布教を通して、「家庭」特に「親子のコミュニケーション」を大切にしてきました。

いつの時代でもお母さんたちは、子どもとどのように向き合えばよいかを試行錯誤しながら子育てをしているようです。

当教室には、1歳半から3歳までの子どもが親子で通っていますが、子どもは人格形成の基礎づくりのために自己選択（作業）を通し、自らの身体と心をつくるために取り組みます。

それをみているお母さんたちは、子どもの困っている様子やそれを乗り越えて集中し、完成していく喜びの笑顔に接していきます。

ある時は心配しながら、ある時は喜びをもって、その子にとってどんなところが難しかったか、どんなところが得意なのかを肌で感じながら、日常生活に生かしているようです。

お母さんがにこにこしていれば、子どもも伸び伸びと育っていきます。子どもの言語も活溌になり、視野も広まって心の安定につながり、親子の明るい関係が育まれていきます。

ローマ教皇フランシスコは、「平和は、正義のみならず、互いに許し合うことだ。武力でなく対話をもって、平和の道は開かれる」と述べておられます。

私たちの小さな日常生活において、家庭での親子の安心が、まさに環境への思いやりや他人へのあたたかい言葉がけとなり、許し合う喜びを感じながら「人格そのものの尊重」へとつながるものとだ思います。

子ども一人ひとりが知的に情緒的に豊かに育ち、平和な人格者として成長するようにと願いながら、今日も子どもたちを迎えています。

代々の集いモンテッソーリ子どもの家主宰

谷本千佳代

神さまの慈しみの中　親子で育っています

聖書の一節に、「神が天地を創造された時、『すべてよし』となさいました」とあります。

けれども人間は、この宇宙の秩序を考えたり他者を顧みたりしないで、ますます利己的になり、より便利に、より快適にと科学や産業を発展させてきました。

しかし、近頃の気象の変動や世界情勢は「ちょっと待って！地球はこんなに苦しんでいるよ」と神様からのメッセージのようにも感じます。

マリア様の慈しみに包まれルルド祭

三本松教会

去る5月19日（日）三本松教会に於いて、第35回目となる「ルルド祭」を開催いたしました。

三本松教会が、水主の霊性センターに移転してからは、3度目の「ルルド祭」となりました。

本教会への交通手段は個人の車に頼る不便な地ですが、広い敷地に立てば、山野みどりを背景に、遥か瀬戸内海を見渡し、春から夏には鶯の声が聞こえ、自然を満喫することが出来ます。

当日の参加者は香川94名、徳島25名、高知ほかの計１２０名により、予定通り12時30分にロザリオの祈りから始め、13時からの諏訪司教様司式によるミサが行われました。

オルガンの伴奏が流れ、集う人が皆ひとつになり、聖歌の歌声が響き、会場は聖霊に満たされました。

司教様は説教で、「霊性センターのこのA棟は、自立支援を必要とし、健康と社会復帰をめざし支え合う『ダルク』の人々の施設として『マリアハウス』と名付けました。ここに集まった一人ひとりは、マリア様の愛といつくしみに包まれています。」と話され、幸せに満たされた、ルルド祭のひとときでした。

ミサの後、会場を移し、手打ちうどんパーティーを開きました。沢山用意しましたが、窯のトラブルで遅くなり、お待たせしてしまいました。

六車議長のうどん作りには、2日前より5名もの方々が遠くからお手伝いに来て下さり、生地踏み、伸ばし、切るなどご支援下さり、成功につなげて頂きました。

ある方は会場にマリア像を大島青松園から運び込みと撤去、また霊性センターへの道案内標識を幾カ所にも設置して下さいました。心から感謝致します。

少人数の三本松教会の伝統あるルルド祭開催には、東讃ブロックをはじめ、他の教会の方々の心からの愛と奉仕をいただきましたことに感謝いたします。皆様ありがとうございました。

三本松教会　中谷美智子

霊性センターA棟にある聖堂でのミサに多くの信徒が与る

助祭紹介

東讃ブロック
三本松教会・霊性センター管理担当助祭
西川康廣師

神さまが準備された私の道

まず初めにお生まれと幼少のころの特に思い出に残るお話などを伺いたいと思います。

私は福岡県大牟田市の炭鉱町において、男2人、女3人の兄弟姉妹の中で上から4番目として生まれた。

しかし長女は幼くして病のために亡くなり、実質4人兄弟姉妹として育ちました。私が5歳の時、大牟田教会のクリスマスイブのミサの中で、家族揃って受洗し信仰の道を歩み始めました。

父は信仰の歩みを熱心過ぎるほど徹底して歩み、家族にも伝えていました。正直言ってそれは『信仰の喜び』というより、何を大事に生きていくべきかを子供たちに徹底的に伝えるためでした。

私が小学2年生半ば頃までは福岡県大牟田市で生活していました。当時乗り物がなかったため、いつも自宅から大牟田教会まで、子供の足で約1時間半かかる道のりを歩いて行きました。

その後、熊本県荒尾市へ引っ越し、それからも自宅から教会まで約3時間はかかっていたと記憶しています。

こうして毎週土曜日と日曜日の2日間は教会へ通っていました。土曜日は公教要理クラス、そして日曜日はミサに与るためでした。

毎日の厳しい家庭生活から解放されると、当然、外では解放感を味わうものです。私もその例外ではなく、土曜日の公教要理クラスでは、常にやんちゃ振りを発揮した要注意人物でした。

クリスマスにはクラスの先生はご絵の裏面に一年間の振り返りを一言添えて手渡していました。

ある日渡された私のカードには次のようなことが書かれていたことを、今でも決して忘れることができません。「康廣ちゃん、あなたの心に神様は全くおられません」と。

この先生は後に聖心のウルスラ宣教修道女会へ入会し、わたしの助祭叙階後に再会することになりました。ご本人は覚えてなかったらしく、当時の話をすると赤面して手で顔を覆われたのがつい昨日のように思い出されます。彼女は数年前に神様のもとへ召されました。

一方、私の父はといえば、土曜日の公教要理クラをさぼれば夕食抜き、また日曜日の説教について一言も話すことができなければ夕食抜き、これを鉄則にしていました。

そういうことで、私は否が応でも土曜日は教会へ行き、日曜日は説教について何か一つでもしっかり覚えて帰るようになりました。

家庭生活でも祈りの生活は厳しいものがありました。朝・晩の祈りは絶対に欠かすことがありませんでした。

父の一声で家族はみな祭壇の前に跪き、特に晩の祈りは十字架の道行き、ロザリオ、連祷等が長々と続きました。しかも手はしっかり合掌の形をとり、少しでも形が崩れると大目玉が飛んできたものです。

そう云う厳しい信仰教育の中にあっての、召命への招きはどういうものだったのでしょうか。

私たち兄弟姉妹が親元で一緒に生活したのは、妹を除いてほぼ小学生までででした。中学からは兄と私は長崎の神言神学院で、姉は福岡のカノッサ修道会で寄宿生活を送りました。

兄と姉は別として、私たこと、これらは後に大きな恵みと力になったのは事実です。

小神学校を卒業するとき指導司祭は私たちに、次のように諭されたことを覚えています。「あなたたちはこれまで温室の中で育てられてきた。規則を守りなさい、そうすれば規則があなたたちを守ってくれる」と。

こうして学び舎を後にして、名古屋の大神学院での生活が始まりました。

私は種々の理由が重なり大神学院を中途退学することになりました。神学院を去るにあたり指導司祭から言われた次の言葉を思い出します。

「あなたは自分に召し出しがないと思っているが、神様はきっとあなたに別の門を開いて下さる」と。

思い起こせば、今歩いている道のスタートが、神様が私に準備された新たな門ではなかったかと思います。

そしてどんなに神の手から逃げても必ず神は私を探し出し、見つけると肩に乗せて憩いの水辺に伴ってくださる、あの良き牧者の姿と重なります。

一旦は社会人として働き出しましたが、この間、心の中に常にこだまする「これでいいのか?」という声を聴いていました。

こうして数年間、社会生活を過ごす中で、一人のオブレート会司祭との出会いがありました。

１９７４年、結婚と同時に、兵庫県伊丹教会（オブレート会司牧）において伝道師としての歩みが始まりました。

高松教区助祭叙階前にも長いこと教会奉仕をされていたと聞いていますが、その大きなきっかけとなったものはどうゆうものだったのでしょうか。

勿論これはある日突然にこうなったというものではありません。第2バチカン公会議から約10年の歳月を経て、全世界の教会に大きな変化が現れ始めていました。

外国からの宣教師は望むべくもなく、また日本における召命の減少、司祭・修道者の高齢化、それに伴う信徒の少子高齢化現象など、その当時から、にわかに表れていたように思います。因みに、日本で働く当時の司祭の平均年齢は54歳といわれていました。

私に伝道師への道を紹介した司祭はよく次のように話していました。

「将来、信徒の中から司祭とともに教会に奉仕する人が必ず必要な時代が来る。そのための準備は、10年～20年の話ではない。おそらく30年～40年かかるだろう。だから今からその準備を始めたい」と。

こうしてオブレート会と高松教区伝道師として32年間、高松教区助祭として13年間奉仕してきたことになります。振り返ればこの間はあっという間のことでした。

教区事務局長の重責から解放された今、これから先の希望や楽しみなど、どんなものがありますか。

私は小教区司牧の現場で叩き上げられてきましたが、助祭叙階後、高松教区本部事務局長として13年間奉仕してきました。全く畑違いの中で試行錯誤しながら教区のために何ができるか考えながら走り通した13年間だったと思っています。

そして今年度から三本松教会と霊性センターの管理者として、新たな任命を受け歩み始めました。

また東讃ブロックの枠組みの中で協力司牧の仲間にも加えていただき、更に小豆島のマリアの園（老人ホーム）のチャプレンの一人として奉仕しています。

事務局では味わえなかった、人と人との出会いと関わりの喜び、一緒に成長していく喜びを今、特に感じています。

確かに事務局長としての重圧と比べると精神的ストレスは幾分緩和されましたが、肉体的には更に忙しくなってきたと感じています。

一日でも長く奉仕ができるよう、自分の体と相談しながら頑張ろうと思っているところです。

最後に自らにとって宝としている「みことば」をお持ちと思いますのでお聞かせ下さい。

今年5月2日に私の一歳年上の最愛の姉、聖心の宣教修道女会シスター、マリア・ジュリアナ千恵子が神様のもとへ召されて逝きました。

私は叙階記念カードに姉と同じ聖句を選んでいました。

それは聖トマスがイエスの前で自らの不信仰を悔い改めて発した「わたしの主、わたしの神よ」（ヨハネ20・28）、という言葉です。

またこれは聖母マリアがマグニフィカトの祈りの中で、「神はわたしに偉大なわざをおこなわれた」とのマリアの信仰宣言の延長線上に重なるみ言葉だと思っています。

45年間の教会生活の中で、喜び、苦しみ、悲しみ、涙、いろいろ経験してきましたが、詩編が語るように、「たとえ死の陰を歩もうとも、主の鞭と杖がわたしを守る」、この力強い信仰告白が私の信仰宣言となれるようにと日々祈る日々です。

これからも皆様方のお祈りによる支えとご協力をどうかよろしくお願いします。

貴重なお話をどうも有難うございました。

公教要理サボれば夕食抜き

出会いや出来事には必ず神さまの働き
神学院で静修講話

6月5～6日、母校である東京カトリック神学院にて、神学生対象の静修講話を致しました。現院長松浦信行神父の計らいでした。

当初は「私でいいのですか」と申し上げましたが、「新司祭としての気持ちと体験をそのまま伝えて欲しい」とのことでしたので、お言葉通りになりますように、と上京しました。

２０１７年度まで在学でしたので、新入生以外は旧知の神学生達の顔がそこにはありました。

すると、それまで抱いていた不安や緊張よりも、むしろ懐かしさと嬉しさが込み上げました。

また、一瞬で神学院時代を振り返り、毎年6月頃に神学院で感じた、ある種の疲労や閉塞感も思い起こしました。

だから、自分の中での反省も、失敗も、喜びも、感謝も、沢山の喜怒哀楽も、楽しかった思い出も、みんなに出来る限り伝えたいと思いました。

スライドと音楽をいくつか使いながら、自己紹介に始まり、神学院の歩み、1年の司祭としての体験を話しました。

偉そうなことは何ひとつ言えない私自身の弱さもあえて沢山話しました。

強調したかったのは、祈り、勉学、交流や遊び、色々な奉仕等は、どれも意味があるということ、今の神学院生活がそのまま司牧生活に直結すること、人と交わり、ぶつかりながら人間を知り自分を知ること、消し難い自我（エゴ）もお捧げすること、一つひとつの出会いと出来事に必ず神様の働きがあること、です。

驚くほど、こちらが恐縮するほどにみんな耳を傾けてくれました。最後に、ゆるしの秘跡の時間をもち、派遣のミサを捧げました。

両日、講話させて頂いた私自身、祈りと振り返りの時を頂いたと感じた恵みの時でした。

読者の皆様には、全国の神学生のため、これから召し出しの道を歩む全ての人のため、また、神学院で奉職される松浦神父様はじめ養成者の皆さんのため、お祈り頂けましたら幸いです。

東京神学院昼食後の後片づけ風景

髙山　徹

教区スケジュール

7月

7日（日）年間第14主日　教区殉教者祭in阿南
14日（日）年間第15主日
15日（月）海の日
20日（土）司祭評議会10:00 宣教司牧評議会、諸委員会・活動委員会13:30
21日（日）年間第16主日
25日（木）聖ヤコブ使徒
26日（金）聖マリアの両親聖ヨアキムと聖アンナ
28日（日）年間第17主日 助祭叙階式13:30 於：桜町司教座聖堂

8月

4日（日）年間第18主日
6日（火）主の変容　日本カトリック平和旬間（～15日）
10日（土）聖ラウレンチオ助祭殉教者
11日（日）年間第19主日
12日（月）山の日　下田武雄師命日（2012年8月12日）
14日（水）聖マキシミリアノ・マリア・コルベ司祭殉教者
15日（木）聖母の被昇天祭
18日（日）年間第20主日
22日（木）天の元后聖マリア
24日（土）聖バルトロマイ使徒
25日（日）年間第21主日
27日（火）聖モニカ　佐々木光雄師命日
29日（木）洗礼者聖ヨハネの殉教

海を背景に野外ミサ

了雪ゆかりの大坂峠歩く

JR阿波大宮駅の前での記念写真

結城了雪神父は大坂峠で捕縛され、大阪に送られ、そこで殉教されたと言われている。

7月7日の殉教者祭に先立ち、その大坂峠を四旬節に歩くことになったが、いろんな都合で5月18日になった。

最初は歩くだけの計画だったが、スティーブ神父様が大坂峠で野外ミサを行って下さることになり、それで歩かないで車で行く人も参加することになった。

私たちが歩く讃岐街道は明治の初めに荷物が運べるように広い街道になり、今はこの道が四国の道となっている。

5月18日に歩くにあたって何度か下見に歩いてみた。高徳線、阿波大宮駅に車を置き、のどかな田園を見ながら十五分くらい歩くと、大坂峠の番所跡に着く。

香川県と徳島県の境の阿讃山脈には、沢山の番所があったようだが、この大坂峠の番所は重要であったらしい。すりへった踏み絵のレプリカや当時の番所での様子が外の掲示板に飾られている。

この番所跡の横から讃岐街道が始まる。石畳があったり、2回ほど車道を横切り、階段を昇って大坂峠の展望台に着く。

村瀬家（大坂口御番所跡）の踏絵石レプリカ

青い瀬戸内と小さな島々や半島、引田の街並みが眼下に見える。カタン、カタンと山々に響く音と共にトンネルから汽車が出てきたり潜っていく。

少し引き返して讃岐相生へ降りる道を下る。県境を通り、道中この山道で行き倒れになったのか女人の小さな祠や、お不動様がある。

山を降り、農道に出て潮の香りがする海岸近くまで歩くと讃岐相生駅。

ここから2時間に1本くらいしかない汽車に乗ると、8分で車を置いた阿波大宮駅。その8分の間に8つくらいのトンネルを抜ける。

後ろのデッキに立つと、トンネルの穴がだんだん小さくなり、ちょっとわくわくする。ゆっくり食事をしながら4時間30分くらいのコースでした。

5月18日は歩く人、車で峠まで行く人、子供も含めて24名。今にも雨が降ってきそうで、新緑から緑一色になった木々が大きく揺れるような天気だった。

スティーブ神父様は白いスータンにザック、木の杖を突き、お遍路さんのようないでたちで出発。

展望台で海を背景にしてテーブルに白い布がかけられ、ミサの準備が整い、その周りを囲み、殉教者のためのミサがスティーブ神父様と、乾神父様によって野外ミサが始まった。

雄大な自然の中でミサに与る

入祭の歌、そして殉教者と私たちの為の集会祈願。第一朗読はⅡマカバイ記7章1～2、9～14節。7人の兄弟と母親の殉教が読まれ、福音の朗読はルカ6章20～36節。

静かでゆったりした時間の流れの中で御聖体を与かり、このような美しい自然に囲まれた野外ミサに感謝しました。

この大坂峠の四国の道は八十八番札所参りの大窪寺から一番札所霊山寺への遍路道でもあり、このうっそうとしたほとんど誰とも行き会うことのない道を、今日も一人の大窪寺から歩いて来られた白装束のお遍路さんと行き交いました。

鳴門教会　喜多早苗

命かけ信徒見捨てなかった結城了雪神父

結城了雪という人

１５７４年、阿波（現在の徳島県阿南市那賀川町）に生まれ、安土桃山時代末期から江戸時代初期にかけて活動しました。

マニラに追放された後、大殉教の時期に日本に戻って布教を続け、阿波と讃岐の境、大坂峠で捕縛され、島原の乱前夜の１６３５年に殉教しました。

当時の禁教令の中、畿内に残った最後の司祭と言われ、彼の殉教後、キリシタンは潜伏の時代に入ることを余儀なくされます。

彼は実直で仕事熱心だったようで、足利家の一員として受けた教育は高く、学業も優秀でした。

セミナリオでラテン語を重視する時代にあって、その成績はトップクラスでしたが、自国語の日本語で神学を学べば、もっと深く理解することができると、非常に進歩的な考え方の持ち主でした。

日本人として日本の文化をよく勉強し、理解し、日本語で上手に説教し、そのため日本人の間で、宣教の成果を上げ感化を与えていました。

日本が鎖国に傾く中で、自国民のために働こうとしていました。

その一方で、外国人の宣教師と交わることもできる国際的な教育を受けた国際人であり、世界と周りに心を開き、自分自身よりも他者に重きを置く人でした。

捕まった時に「私は誰にも迷惑をかけなかった」と役人に語ったことはよく知られています。

セミナリオでも優秀な成績

宣教師として

自分が信じている素晴らしいイエスの教えを、命をかけて人びとに証し、後世代の私たちにも何か大切なものを遺そうとしました。

その意思がとても強く、自分の望みも明確で、苦難も、ものともしませんでした。だから大殉教の環境の中でも宣教に励むことができたのでしょう。

またその賢明さから、長い間、捕らえられなかったことも、かなりめずらしいことでした。

あの時代、追放地のマニラから帰国するのも大変危険なことだったにも拘らず、あえて帰国したのは、日本に残され、待っている信徒を見捨てることができなかったからでしょう。

ここでも、自分自身よりも他者に重きを置く性格がよく表れています。

信徒とのつながり

20年間、一人で日本の津々浦々、青森津軽地方や佐渡島まで廻れたのは、信徒との繋がりと強固な信頼関係の中で、信徒集団が密かに支えていからでしょう。それを彼は一切公言しませんでした。

彼を守ったのは確かに信徒たちでした。追放された信徒たちに、物資を持って駆けつけ、援助しに行くという基本的な姿勢が、信徒たちとの深いつながりをもたらしたのだと思われます。

信徒同士もこの厳しい環境下で支え合って暮らしていました。それは信仰がその結びつきをより一層強くしていたからと思われます。

長崎奉行、大坂奉行、各大名や老中たちは彼の活躍を知り、一緒になって捕えようとしました。

捕えるまで2ヶ月程かかっています。彼は小さな船で、転々としながら隠れていました。

彼から洗礼を受けた足利家の信徒の人々も門を開け、逃げ道を作ってくれたりしたのでしょう。

彼の霊性

人のため、民のために生き、人々に仕える生涯でした。キリストとの出会いによって照らされ磨かれていった人格を通して、人々に洗礼を授け、倒れた信者を立て直し、人としてキリスト者として、自分の信仰を貫く道を選び通しました。

気付き

自分のことよりも、他者が求め必要としていることを理解し、わかろうとする姿勢の大切さを感じます。

自分が得たものを教え与えようとしても、他者はそれを必要とせず求めてもいないかもしれません。まずはそれに気付かなければと思います。

転じて、宣教に関しても、その土地の人が、求め必要としているメッセージや教えがどういうものであるのかを理解し、教会の宝を以てそれに応えていくという視点が大事ではないでしょうか。

今は教区、小教区制度の教会ですが、当時は信徒の共同体に神父が行っていました。基本的に信徒が教会を作り、全国のネットワークを持っていました。

信仰や祈りが、教会共同体の結びつきや絆を一層強くします。

その集いでの物的、時間的なもの、才能やミサ、霊的な分かち合いが、信仰を深め、他者に心を開く為の善い循環となります。これは、福音マーケットと密接につながるものだと思います。

結城了雪神父という福者は、本人の霊性、信仰、人格にも増して、当時の信徒の隠れた支えや援助、信頼関係と、その相互の協力、働きによって誕生したのでしょう。

ブラザー・八木信彦

編集後記

典礼暦は聖霊降臨を祝い、年間に入りました。高松教区は7月28日（日）に2名の助祭叙階式を執り行います。高松教区の現在の司牧状況の中で、2名の助祭の誕生は大きな恵みであり、神様から与えられたその価値もまた大きなものであるように思います。教区民の皆様とその喜びを共にしたいと思います。

時を同じく長崎教区に補佐司教が与えられます。また共に喜び祝いましょう。（J）

聖ドミニコ宣教修道女会

私たちは、自分を創造しようとするこどもを
まなび、護りましょう
暁の星学園
鳴門聖母幼稚園　高知聖母幼稚園
阿南聖母幼稚園　海の星幼稚園